

文化文政期江戸市中の眺望景観についての
「遊歴雑記」と「江戸名所図会」の比較考察

A Comparative Study of Landscape Description Records in the “Yureki Zakki” and
”Edo Meisho Zue”: Regarding Depictions of Views of Edo City during the early
Nineteenth Century

尾 藤 章 雄

Akio BITO

文化文政期江戸市中の眺望景観についての

「遊歴雑記」と「江戸名所図会」の比較考察

A Comparative Study of Landscape Description Records in the “Yureki Zakki” and “Edo Meisho Zue”: Regarding Depictions of Views of Edo City during the early Nineteenth Century

尾 藤 章 雄

Akio BITO

1 本稿の目的

著者は1800年代終わりに近い文化文政期の江戸市中の景観の主観的評価について、記述資料に基づいた分析を進めてきた（尾藤，2013；2014）。資料としては主に十方庵敬順が 1814（文化11）年に書き上げた地誌書である「遊歴雑記」（以下雑記）を用いている。初編に含まれる 196 項目の中から、現在の東京23区内にある場所を扱った 124 項目総てを検討したところ、眺望景観が高く評価されている場所が34箇所見つけた。

尾藤（2014）においてはこの 34 箇所を対象に、その視点の位置、眺望方向、主対象とそれに対する筆者の景観評価を表にまとめ、眺望景観を評価する際に用いられている用語の面から検討した。あわせて、当時の地形条件を再現した地図上に評価の高い眺望点の分布を記したところ、江戸湾に向けて東流する神田川（雑記では神田上水と記述されているが本稿では以下神田川と表記）、渋谷川や目黒川などの谷地を臨む台地末端、隅田川沿いの浅草・向島周辺に集中していることがわかり、高い評価につながった主対象は山や川、海浜や渚、農地（田畑）、花木、家や人など場所により方向により異なっていることが明らかになった。

本稿では雑記から明らかになったこれまでの知見に基づき、江戸名所図会（以下図会）にある記述や挿画、迅速測図、さらに新編武蔵風土記稿（以下風土記稿）の内容をあわせて検討し、文化文政期に評価の高い眺望点とされたのは具体的にどのような場所であったのかを明らかにした。

雑記と風土記稿の概要については尾藤（2013）で述べたので省略するが、図会は江戸時代天保年間に神田に住んでいた斎藤長秋・莞斎・月岑が代々引き継いで作成していったもので、挿画は長谷川雪旦が担当している。1834 年から 1836（天保 7）年にかけて、全部で 7 巻 20 冊が刊行された。迅速測図は明治政府が山県有朋に命じて作成させた縮尺凡そ 2 万分の 1 の地図で 1886（明治 19）年に刊行されており、作成当時（およそ 1880 年～1886 年）の土地利用を詳しく知る事ができる。迅速測図が書かれたのは、雑記や図会が刊行されてからおおよそ 50 年が経過しており、時代的なずれがある。しかしながらこの間、東京湾岸の埋立地や、一部施設の立地、市街地の拡大などを除けば、地形や土地利用には大きな改変・変化はないので、雑記と図会の刊行された時点の土地利用や道路付きを知る手がかりとして使用した。

雑記の初編において評価の高い眺望点のうち、図会にも挿画があるものは 22 箇所である。本稿ではこれを神田川筋、渋谷川・目黒川筋、および低地・海浜に分類し、尾藤（2014）にまとめた雑記の景観記述（表 1）と対比する。なお図会については名著研究所（1975）の巻 1～巻 4 から該当部分を抽出し、挿画については、国立国会図書館デジタルコレクション、江戸名所図会 斎藤長秋 編（博文館、

1893) の図版を PDF ファイルにダウンロードして使用した。また迅速測図については、農業環境技術研究所の提供する歴史的農業環境閲覧システムから閲覧した。雑記の記述については前稿と同様、漢字・かな使いとも江戸叢書三巻（江戸叢書刊行会、1980）に収録されたものによったが、表記は必要に応じて新漢字・かな使いに修正した。また地形にかかわる呼称は松田（2008）を踏襲した。

2 神田川筋

(1) 藤森稲荷社（雑記：初編の上 五 下高田村東山藤稻荷／図会：巻の四 藤森稲荷社）

藤森稲荷社は神田川の谷の北側斜面にあり、図会の挿画（図 1 上）では南東から北西方向に台地面とほぼ同じ高さから俯瞰している。迅速測図によれば、この付近では川幅 15 メートルほどの神田川が、その 20 倍以上もある幅広い谷底を流れている。雑記ではこの稲荷社から東南、南、西方向に眺望が開け、眼下の谷底に広がる農地一帯にある四季折々の生物、人、花の風景を主対象に挙げ、「一奇観といはんかし」、あるいは「實に雅客文人の愛すべき雅景は天造の風色といふべし」と称賛している（尾藤、2013 に詳細）。

表 1 遊歴雑記の眺望景觀に関わる記述（尾藤、2014 を修正の上一部を抽出）

本稿の区分	遊歴雑記の項目名称	視点の位置 (当時)／現在の住所	視点場の地形面	眺望方向	主対象	(季節) 景觀評価
神田川筋	初編上 5 下高田村 東山藤稻荷	武州豊島郡下高田村藤稻荷／新宿区下落合 2-10-5	神田川に臨む 豊島台南端	東面 遠く(南) 近く(西) 遠近 眼下近景(南)	耕地を眺望 柏田戸山を望み 橋のかしらの下流をながめ 花にめで こころの野の花はいらるも更に／よろずの摘草にひのかたを惜み ほととぎすの初聲より打集ひつゝ田種する様 豊島よりほたる一面に飛かふ もみぢ 雪見	風色天然にして佳興あり (春～初夏) 此土地の一奇観といはんかし
	初編上 61 目白駒突塚 五月雨塚	武州豊島郡目白臺下さみだれ塚／文京区関口 2-11-3	神田川に臨む 豊島台南端	南眼下 東	絶壁の崖下に天造の松柏繁茂し、溪間よりつたはれる清水は、おのづから見より落、川前には橋のかしらの下流いさぎよく、向ふには渺茫たる耕地を見はらし 夜さむの里より牛嶺(小石川牛天神)を眺望し、花に富、富に富、春は遠近の花に愛、畦路に摘草する人、又は葉のはな蓮花草のゆるが如き風情、夏は手摘田種ほたる、秋は豊初聲もみぢ、冬は枯野原のゆふべにいたるまで	(秋～冬・中春) 實に雅客文人の愛すべき雅景は天造の風色といふべし
	初編中 7 小石川牛天神の景望	小石川牛天神(龍門寺)／文京区春日 1-5-2	神田川に臨む 豊島台南端	南、北西、西	南は飯田町より神田橋の邊まで見晴し、又西の方(北西)は目白臺、早稲田、高田、大久保の邊より、近く(西)は赤城、養士、江戸川筋人の往来するまで、一望の中に有りて	風景いはん方なし
	初編下 44 造谷金王丸 堀屋堂人肌 観世音	武州上野村長泉寺／渋谷区神宮前 6-25-12	渋谷川に臨む 淀橋台	西 西眼下	四方山の花咲き頃より、耕地一面の家のはなも又めづらしく ほととぎす、ほたる、むしの音、花野、紅葉、雪見まで 耕地平山等を見晴し／茶園を正面に見る 坂を上する行客の己がきま(なる／大園寺中の五百羅漢の石像を身下し 湧き出る森林水を眺望 一面に煙吹き横ひし風情 舟の行進ふ意海は一望の中に有 庭敷の白きを遠望し 白いかね目黒等の耕地を見晴らし、木立の間に櫻の淡花せしは、遊の白糸と詠しも理りや、又は花の葉の美しき 清の景望	(春・四季) 風色一品の土地といはんかし 豊島の風景實に一品有りといへど (春) 一社観と云べし
	初編中 74 目黒行人坂 富士見の茶店	目黒行人坂北側／目黒区下目黒 1	目黒川に臨む 淀橋台南西端	西 西眼下	坂を上する行客の己がきま(なる／大園寺中の五百羅漢の石像を身下し 湧き出る森林水を眺望 一面に煙吹き横ひし風情 舟の行進ふ意海は一望の中に有 庭敷の白きを遠望し 白いかね目黒等の耕地を見晴らし、木立の間に櫻の淡花せしは、遊の白糸と詠しも理りや、又は花の葉の美しき 清の景望	豊島の風景實に一品有りといへど (春) 一社観と云べし
	初編中 58 品川の驛 御殿山のさくら	武州荏原郡御殿山／品川区北品川 3-5	江戸湾に臨む 目黒台東端	西 西眼下	坂を上する行客の己がきま(なる／大園寺中の五百羅漢の石像を身下し 湧き出る森林水を眺望 一面に煙吹き横ひし風情 舟の行進ふ意海は一望の中に有 庭敷の白きを遠望し 白いかね目黒等の耕地を見晴らし、木立の間に櫻の淡花せしは、遊の白糸と詠しも理りや、又は花の葉の美しき 清の景望	(春) 美しき絶景にして佳興有り 風景尤もよく……いふもさらに
低地・海浜	初編上 39 豊島地蔵堂 専稱庵	武州豊島郡豊島村専稱庵／北区王子(移転のため詳細不明)	隅田川沿いの 沖積低地	西 西眼下	清の景望 渺茫たる耕地を見わたし 荒川の長流を眼下に眺望 大森村板橋から羽根田路(北) 耕植を望 清に千鳥蘭などの求食／海士の漁引ありさま／海越の幽 房殿の遠山を景望す 遙かに房殿の山々を望 行旅浦より、飯江、おこなねの州崎をながめ 芝浦より黒崎、品川は手にとる如く、又河崎の藤より南へ出たりたるはすゞの浦、横須賀とかや 沖に漁船(てへん)する舟、磯壇に臨や千鳥の求 里道の千沼にあそび狂ふ 西より東の方 西北 東南	心暇ともに打はれて、實に賞すべきの景地たり 頗る景地にして 此風色天然にして眺望いはん方なし
	初編上 49 羽根田村の 辨財天	武州荏原郡羽根田村辨財天／大田区羽田六丁目(移転のため詳細不明)	江戸湾に臨む 海浜	西 西眼下	大森村板橋から羽根田路(北) 耕植を望 清に千鳥蘭などの求食／海士の漁引ありさま／海越の幽 房殿の遠山を景望す 遙かに房殿の山々を望 行旅浦より、飯江、おこなねの州崎をながめ 芝浦より黒崎、品川は手にとる如く、又河崎の藤より南へ出たりたるはすゞの浦、横須賀とかや 沖に漁船(てへん)する舟、磯壇に臨や千鳥の求 里道の千沼にあそび狂ふ 西より東の方 西北 東南	此風色天然にして眺望いはん方なし
	初編下 39 深川川崎町の 景望	武州葛飾郡深川川崎町辨財天／江東区本場 6-13-13	江戸湾に臨む 海浜	西 西眼下	大森村板橋から羽根田路(北) 耕植を望 清に千鳥蘭などの求食／海士の漁引ありさま／海越の幽 房殿の遠山を景望す 遙かに房殿の山々を望 行旅浦より、飯江、おこなねの州崎をながめ 芝浦より黒崎、品川は手にとる如く、又河崎の藤より南へ出たりたるはすゞの浦、横須賀とかや 沖に漁船(てへん)する舟、磯壇に臨や千鳥の求 里道の千沼にあそび狂ふ 西より東の方 西北 東南	すべて景望の風色飽るの海濱なり／渚の眺望は一瞬千里(全体を指す) めづらしく 一佳興たり (春) 風色いはん方なし 風色に於ては奇(妙)、久しく顔ひて飽るの地也
	初編下 40 砂村新田 元八幡宮の 道邊	武州葛飾郡深川川崎町元八幡宮／江東区南砂 7-14-18	江戸湾に臨む 海浜	西より東の方 西北 東南	目白に渡る舟など、唯舟の音のみたる 風しなを耕地を見晴し 霞しらのぬるき海浜を眺望して	(春) 風色いはん方なし 風色に於ては奇(妙)、久しく顔ひて飽るの地也

稲荷社のあった下高田村について、風土記稿には「稲荷原」という字名の記述がある。稲荷社の北側は武蔵野台地の豊島台と呼ばれる洪積世の台地であり、迅速測図では台地面で標高 30m～35m 程度だが、神田川の谷底からの比高は 20m 以上あり、水利がないため一面に畑が広がり、所々に茶畑や竹林も見られる。挿画当時は字名の如く一面の原野だったかもしれないが、等高線がまばらなことからほぼ平坦面が続いていたと推定される。風土記稿にも「目白邊より練馬村邊への往還掛れり」とあり、挿画のような鬱蒼とした森や山が見えたとは考えにくい。稲荷社の後方に、この時期の大和絵の技法として一般的な「すやり霞」¹⁾を描くことによって遠近を切り離し、比高を大きく見せ、さらに遠望を深い山にデフォルメすることによって、稲荷社の尊厳を強調した構図になっていると考えられる。

(2) 五月雨塚（雑記：初編の上 六一 目白胸突塚五月雨塚／図会：巻の四 芭蕉庵五月雨塚駒留橋八幡宮水神宮）

五月雨塚は藤森稲荷社と同じ神田川の谷の北側斜面にある。図会の挿画（図 1 中）には、西の遙か遠方に秩父山系が描かれ、神田川が上流まで追えることから、東南東から西北西に、台地面より少し高い位置から俯瞰していると推定される。

ここで神田川は谷の北側斜面沿いに流れ、斜面の麓に芭蕉庵があり、登った頂部の豊島台の台地面近くに五月雨塚がある。俳人の松尾芭蕉が江戸末期に、此の地で神田上水の改修に関わった際に 3 年ほど住んだと言われる庵跡である。雑記にある胸突坂とは急坂を意味し、「絶嶮の崖下」という記述も含め、急な斜面であったと思われるが、挿画では龍隠庵や水神社、八幡宮などが斜面上に数段に分けて配置され、前述の稲荷ほどには急斜面が強調されていない。

稲荷社よりも神田川に沿って 2 キロほど下流に位置し、谷の幅が 1 キロ近くに広がっているため、蛇行して流れる神田川南側に広がる農地は、雑記の「向ふには渺漠たる耕地を見はらし」の記述通り広く、挿画では庵の急な斜面よりも、長閑な谷底の風景や秩父連山の遠景が強調される構図である。五月雨塚周辺から北側奥にかけては松林が描かれているが、稲荷社の挿画と違って鬱蒼とした様子はない。迅速測図では、すぐ北側に護国寺から流れ下る神田川の支流があり、そこまでの台地平坦面は幅が狭く、往還が走る辺りは茶畑に混じって多数の農家も散見される。前述の稲荷社の北側の台地面と比較して、開けた様子で描かれているのはこのためか、或いは塚（庵）は神社と異なり、尊厳ある描き方を必要としていなかったためであろう。

(3) 牛天神社（雑記：初編の中 七 小石川牛天神の景望／図会：巻の四 牛天神社牛石諏訪明神社）

牛天神社は、神田川が東から南東方向に流路を変え、飯田町に向かう左岸の高台にあり、藤森稲荷社や五月雨塚と同じ豊島台と呼ばれる台地面の南端に位置する。挿画（図 1 下）は西から東方向に、台

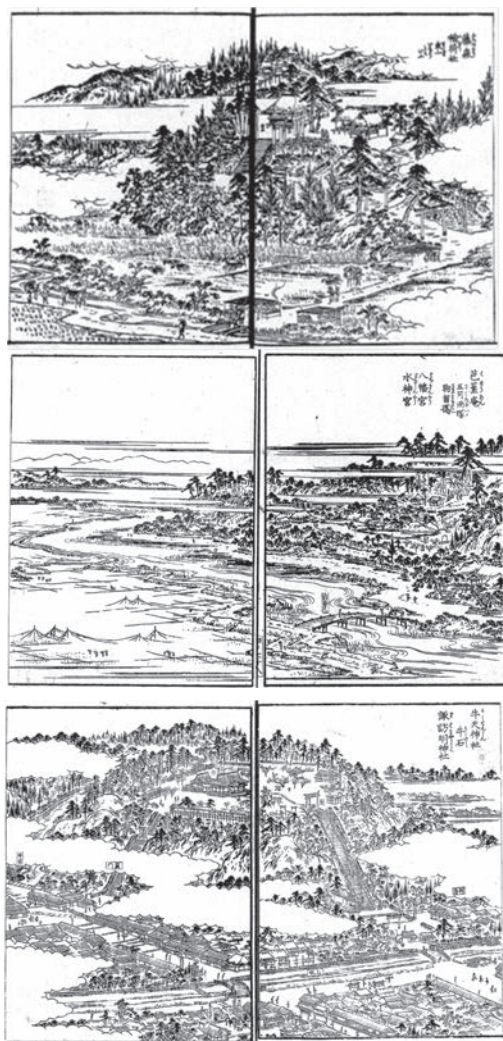


図 1 名所図会

上) 藤森稲荷社 中) 芭蕉庵五月雨塚駒留橋八幡宮水神宮 下) 牛天神社牛石諏訪明神社

地面より少し高い位置から俯瞰している。神社から西に降りる長い階段下は整備された神田川が直線状に流れ、橋を渡った右岸には多数の町家が描かれている。左上方に伸びる道は、階段状の段差があるので登り坂と推定され、安藤坂を経て伝通院へ至る道に比定できよう。神社下や神田川沿いは町家が連続するが、神社は植生のない急崖や松林に囲まれたように描かれている。迅速測図では、裏手に中仙道が走るこの付近は人家が密集しており、この挿図のような鬱蒼とした様子は考えにくい。すやり霞の挿入により、藤森稲荷社と同様、神社の尊厳を強調する構図にデフォルメしてあると考えられる。

神田川に沿う道は目白に向かう往還で、左手は前述の五月雨塚や藤森稲荷社などを経て落合から猪之頭へ続き、右手は江戸城外堀へと続くが、いずれの道にも行きかう多数の人々や籠かきが描かれる。藤森稲荷社や五月雨塚と違って、城下に近い繁華な場所であることが強調される構図である。

雑記にも神田川に沿って南の飯田町や神田橋、西に 4 キロ程離れた高田村や大久保が見渡せて眺望の良いことに加えて「人の往来するまで一望の中に有て」との記述があり、前の 2 箇所が長閑な「天造」、或いは「天然の風景」を主対象としていたのと対照的に、城下に近い人の行きかう賑やかさを称賛している。

神田川筋の 3 箇所に通ずるのは、神田川のいずれも左岸の、武蔵野台地豊島台の高台、或いは斜面に位置する神社、塚などが視点場となって、神田川の谷を見下ろすという構図である。いずれも挿画は南側の台地面とほぼ同じ高さ、或いは少し上方から俯瞰することで、境内の建物配置などが明瞭となっている。また、神社の場合には、周囲の植生や比高を相対的に強調したり、裏手をデフォルメするなどして、尊厳を強調する構図となっている。

神田川筋の 3 箇所は藤森稲荷社が飯田町の外堀から 3.5 km、五月雨塚が 2.5 km、牛天神社が 800m の位置にあって次第に城下に近づいていくが、藤森稲荷社や五月雨塚に比べて、牛天神社だけは市街地の中にあった様子がよくわかるが、明治 11 年に東京府東京市域としてこの小日向付近から東側が小石川区に設定されたことも考慮すると、江戸で市街地としての様相を呈していたのは、外堀からおおよそ 2 km 程度であったのだろう。

視点場の位置を地形条件に重ねて示したのが図 2 である。名所図会挿画の俯瞰方向を矢印で示した。地形条件については、国土地理院の作成した数値地図 5m メッシュ（標高）のデータをカシミール 3D のフリーソフトを使って地図化し、起伏を強調する加工を施した上で標高に応じて着色を施してある。

3 渋谷川・目黒川筋

(1) 金王八幡社（雑記：初編の下 四四 渋谷金王丸瀧見堂人肌観世音／図会：巻の三 金王八幡社）

金王八幡社は武蔵野台地の淀橋台と呼ばれる台地面を削って南東方向に流下する渋谷川の左岸に位置する（図 3）。図会の挿画は南西向きの社を東から西方向に、台地面より少し高い位置から俯瞰しており、渋谷川の上流が追える構図になっている。北側の神社裏には凹凸のある山が連なるように描かれているが、淀橋台の台地面は前述の豊島台とは成因が異なり、多数の小谷が樹枝状に台地面を刻んでいたために起伏が大きかったことから、デフォル



図 2 神田川筋の地形条件と名所図会挿画の俯瞰方向（矢印）

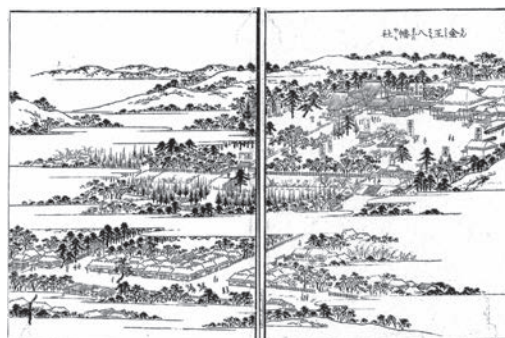


図 3 名所図会 金王八幡社

メとは判断できない²⁾。迅速測図によれば、この挿図の左上方で渋谷川に代々木から来る大きな支流が合流しているはずだが、よく見るとこの二股の谷の様子も正確に描写されている。

表門を下ったところに小川があり、さらに参道を進んで鳥居を出た先には町家が密集する。迅速測図によれば、この町家は渋谷川の左岸（北側）に沿っているので、すやり霞に隠された付近と推定される。

神社内および参道周辺などには多岐にわたる樹種が描かれているが、迅速測図によるとこの金王社周辺には、畑に混じって茶、梨、李の果樹園のほか桜、竹などの林地も多数散見される。雑記の記述にも「四方山の花咲き揃ふ頃より」とある。城下から4kmほど離れた郊外と言えるこの場所で、茶や果樹を中心とした多岐にわたる商品作物生産が行われていたことが推定できる。

(2) 行人坂（雑記：初編の中 七四 目黒行人坂富士見の茶店／図会：巻の三 夕日岡行人坂）

行人坂は金王八幡社と同じ淀橋台と呼ばれる台地面の南西端から目黒川に下る坂で、降り始めの北側に富士山を正面に臨む有名な富士見茶屋があった。挿画（図4上）では行人坂は屈曲した長い坂道になっており、下りきった目黒川には太鼓橋に多くの人々が描かれている。雑記も眼下に広がる農地と遠く聳える富士山、この坂を行きかう人々の様、大園寺の五百羅漢と、池上あたりの森林まで眺望できることから「登臨の風景實に一品有とはいへど」と眺望だけでなく人々の様子も称賛している。地平線上には帆船の浮かぶ品川沖の海も描かれているが、迅速測図にあるように目黒川の谷が幅500mほどの広さで江戸湾に面していたために、特に南東方向に眺望が開けていたのである。この目黒川の下流が追えることと海の見え方から、挿画は北西から南東方向に行人坂を台地面の高さから俯瞰していると推定される。

迅速測図によるとこの右岸（南側）の台地斜面は緩やかで、頂部でも標高は25m前後、約3km南にある池上本門寺も標高20m～25mの荏原台と呼ばれる台地面でほぼ同じ高さにあるので、この行人坂から「池上邊の森林迄を眺望（雑記）」することはかなり難しかったと思われるが、挿画はこの池上方向を含め、むしろ目黒川下流方向に品川の海が見えていた眺望の方を強調した構図になっている。

(3) 御殿山（雑記：初編の中 五八 品川の驛御殿山のさくら／図会：巻の二 御殿山看花）

御殿山は武蔵野台地の目黒台と呼ばれる台地面の南東端で品川宿を見下ろす位置にある、図会の挿画（図4下）の解説に「数千歩の芝生たり」とあるように足下は芝が広がり、吉野から運ばれて植えられた桜、枝ぶりの良い松などが多く植えられていた。直下には品川宿と思われる町家が密集し、沖に帆を下ろして停泊する船も描かれていることから、この挿画は御殿山を西から東方向に、ほぼ松の樹高から俯瞰したものと推定できる。雑記では逆の西方向に白金、目黒などの農地も遠望できると記述されているが、迅速測図によると御殿山は目黒川の

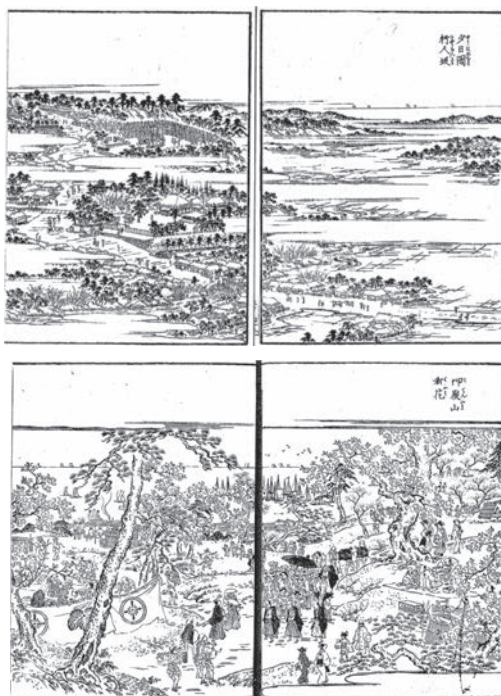


図4 名所図会
上) 夕日岡行人坂 下) 御殿山

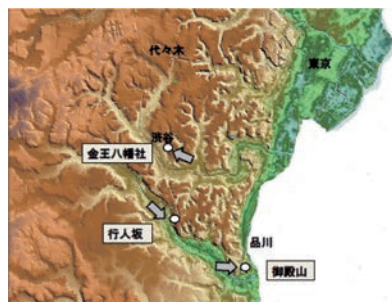


図5 渋谷川・目黒川筋の地形条件と名所図会挿画の俯瞰方向（矢印）

低地に南に突き出した高台なので、目黒川上流部の農地も広く俯瞰でき、桜の樹間から東の海浜と西の農地の対比が楽しめたのであろう。

挿画では貴賤を問わず様々な人々が花見を楽しむ様子が細かく描かれ、雑記と違って眺望よりもそこに集う人物本位の構図になっている。あわせて松や桜の枝ぶり、幹に見られる樹皮の文様、裂け目や穴、芝目の方向、さらにはこの御殿山の起伏の様子まで仔細に描かれるなど写実的な描写も特徴である。

迅速測図によれば、海から御殿山頂部までの比高は 25m 程度しかなく、品川宿の町家の屋根が大きく描かれている点も、デフォルメとは言えない。視点場の位置を地形条件に重ねて示したのが図 5 である。なお、江戸湾の海岸線については、迅速測図にあわせて修正を施してある。

4 低地・海浜

(1) 地藏堂（雑記：初編の上 三九 豊島地藏堂専称庵／図会：巻の五 紀昀明神社清光寺若宮八幡宮豊島川地藏堂）

地藏堂は龜島山専称院が正式名称で、最初はこの地に地藏堂として創建されたが、宝永年間（1704-1711）に祐天上人によって浄土宗に改宗、中興され、昭和 7 年都市道路計画により王子から板橋に移転したとされる（板橋区教育委員会資料）。図会には別に西福寺の挿画があり、石神井川が遠く帆船の浮かぶ「としま川」に合流するように描かれているので、この挿画（図

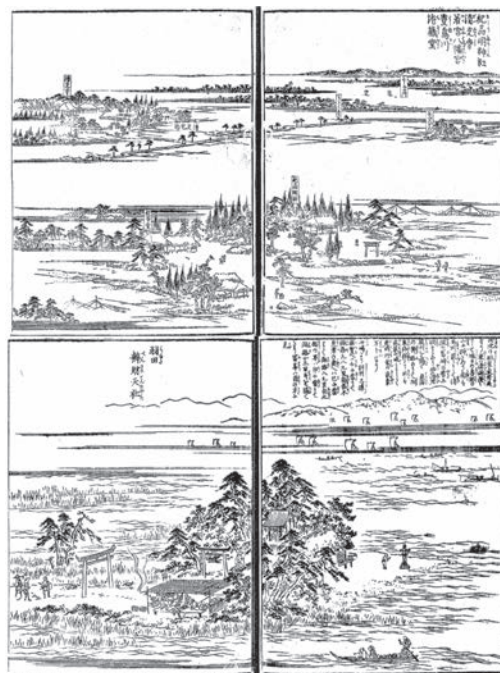


図 6 名所図会の挿画

上) 紀昀明神社清光寺若宮八幡宮豊島川地藏堂
下) 羽田弁財天社

6 上) でもとしま川が隅田川に比定される。地藏堂（図 6 上）は、このとしま川沿いに描かれているので、現在の隅田川の蛇行形態から見て、北区豊島の東に突き出たあたりと推定される。

地藏堂の右手に書かれた若宮八幡宮（現豊島若宮八幡宮）と、左手に書かれた清光寺はほぼ南北に位置していることからみて、挿画は南西から北東方向に、かなり高い位置から俯瞰したものと推定され、としま川を隔てて遠くに描かれた山は方向から見て下総台地と思われる。

蛇行するとしま川（隅田川）に沿う自然堤防と思われる高まりに町家が散在するが、地藏堂辺りには畑地が一面広がり、雑記の「渺茫たる耕地を見わたし」の記述と一致する。また雑記の「渚の景望」は、としま川の川幅が広く帆船も多数見られたことから、海の渚にたとえられたのであろう。ただ、地藏堂や清光寺などが小さな高まりにあるように描かれているのは迅速測図からは確認できず、比高を強調する形での若干のデフォルメが考えられる。しかしながら、としま川と農地の織りなす、どこまでもひらけたこの地の眺望が「風景尤もよく」、或いは「心眼ともに打はれて、實に賞すべき景地たり」と雑記で称賛されている様子は、この挿画からも伝わってくる。

(2) 羽田辨財天社（雑記：初編の上 四九 羽根田村の弁財天／図会：巻の二 羽田弁財天社）

雑記では東海道から羽根田路が分かれ、海に沿って一里あまり、羽田辨財天社に至るまでの道筋から細かな記述があるが、東側の海に見える水鳥や人を中心に主に近景に視点が向いている。著者が「予が豫ての遊歴の骨髓たり」と最大限の称賛をしている、評価の高い場所である。

挿画（図 6 下）では遠望に連山が描かれているが、これはその大きさから武蔵野台地の荏原台や目黒台の面が、幾重にも重なって見えているものと思われる。挿画はこの点から南東から北西に羽田辨

財天社を上方から俯瞰したと推定される。

ここからの眺望については、挿画の解説には青い海原、朝日が房総の山にかかる、多摩川に富士山の雪が映る、北に筑波山が見えるなど四方の遠景が中心に記述されているが、雑記は房総の山々のみで、眺望が開けていることをより強調したい意図が感じられる。一方で周りは蘆の原には釣船五艘と沖合に帆船が一六艘、また近景にも灯籠に佇む人、荷運びの船に3人、鳥居手前にも参拝客3人、露店にも4人が寛いでいる様子が描かれており。記述とは違って辨財天内外の人の様子を詳しく描いた構図になっている。海浜の近景ではそこに遊ぶ人々の様子が重要な主対象になり得ると考えられる。

参考までに同じ場所では新編武蔵風土記稿にも挿画があるが、俯瞰する角度と遠近の度合いが微妙に違っており、羽田辨財天社の置かれていた要島の鳥居と社殿の配置、海原に浮かぶ帆船と釣船は共通しているながら、やはり船や人物、そして境内の様子がより強調される構図になっている。

(3) 砂村富岡元八幡宮（雑記：初編の下 四十 砂村新田元八幡宮の逍遙／図会：巻の七 砂村富岡元八幡宮）

中川河口の江戸湾岸にあり、富岡八幡宮が深川に移される前にここにあったとの言い伝えがあるため元八幡という名称がついた（図7）。雑記には眺望として青い海、果てしなく広がる耕地だけが記述されており、この開けた眺望に対して「風色に於いては奇奇妙妙、久しく憩ひて飽ざるの地也」と評価する。図会の挿画では、蘆の広がる干潟の中に松林に囲まれて社が一つ立つ様子が描かれているが、人は社前の道を歩くものを加えても5名のみと寂しい風景である。遠く地平線に描かれるのは葛西の方角と思われる。迅速図で確認すると、荒川放水路掘削前の中川の右岸、八郎衛門新田の西側に位置し、周囲は新田集落が多数存在し、一面の水田が広がっている。また参道は海沿いの道に接続するが海浜にあるために周りは葦田と干潟が連続するのみである。八幡宮が海を向いていることから推定するに、挿画は南西から北東方向に俯瞰していると推定される。これら3つの場所について、視点場の位置を地形条件に重ねて示したのが図8である。

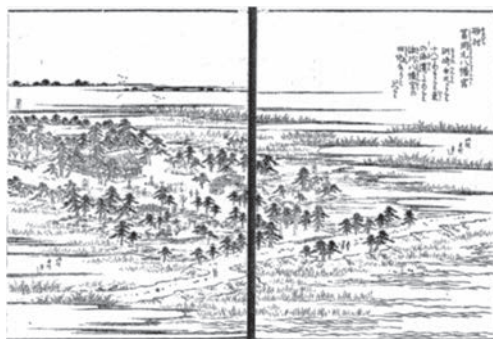


図7 名所図会 砂村富岡元八幡宮



図8 低地・海浜の地形条件と名所図会挿画の俯瞰方向（矢印）

5 遊歴雑記と江戸名所図会の比較考察

以上、雑記の記述と図会の挿画を対比して述べてきたが、いうまでもなく雑記の記述は評価の高い眺望点自体に視点場を設けた記述であり、一方で図会の挿画は、当該地点を俯瞰できる離れた場所から描かれたものである。雑記の記述と図会の挿画の眺望景観は必ずしも共通するものではない。しかしながら、いずれの場所も当時の江戸市中で評価の高い眺望点ばかりなので、図会の挿画を検討することで、雑記に書かれた場所について具体的に当時の様子を説明することが可能となった。

図会の挿画に共通する特徴を指摘するなら、参道の長軸方向を左上から右下、或いは右上から左下に

配置できるような方向で俯瞰していることである。参道に対して社殿は正面に位置することが多いので、参道の長軸から角度をずらして描くことにより、境内の建物の配置などをわかりやすく示す意図があろう。神田川筋では、神田川がほぼ東西に流れ、北側の斜面に藤森稻荷社、五月雨塚が立地するが、特に神田川上流や秩父連山など西方向に眺望が開けているためか、南東から北西方向への俯瞰が採用されている。なお、視点は台地面とほぼ同じ高さが基準になっているようで、これは神社の対面の台地上から見た景観を想定していると考えられる。

低地・海浜の神社でも参道の長軸方向に対して同様の角度を取り、羽田辨財天社、砂村富岡元八幡宮いずれも南、或いは南西から北東方向が採用されている。これは江戸湾の海浜が羽田辨財天社においては南北、砂村富岡元八幡宮では東西に延び、いずれも北東方向に遠く下総台地などが描けるためである。唯一、地藏堂は隅田川に面するが、これも川の流路がほぼ南北になる位置にあり、同じように南西から北東方向を俯瞰したと推定される。海浜や低地においては台地面と異なって起伏に乏しいために、神社などを多少デフォルメして高台に描くことに加えて、地平線上に広がる遠望に山などのアクセントを描く必要があり、北東方向の下総台地が見える方向が選ばれた可能性もある。

当時の風景画のうち、特に名所を描いた大和絵には多くのデフォルメがあることはよく知られている。しかし本稿で挙げた眺望点では、迅速測図や地形条件から予想される風景と挿画に大きな乖離はなく、神社奥や遠望についてのみ若干のデフォルメが感じられる。この点は当時の歌川広重、葛飾北斎などの描く江戸の風景画にも共通することが知られているが、その性格上風景の情趣を高めるための操作（清水・布施，2009）であったという指摘の通りである。なお、挿画における神社など主対象のクローズアップの程度（どれくらい近く寄って、或いは遠く離れて描かれているか）は様々で、全体に占める境内の描写の面積割合は藤森稻荷社、牛天神社、羽田辨財天社で40%、砂村富岡元八幡宮で30%、金王八幡社が20%程度であり、神社の規模やその歴史的背景などと直接の因果関係はみられない。

名所図会の類は本稿で扱った以外にも数多くあり、同じ眺望点を描いた挿画も多い。今後はこれらも参考にしてより具体的な場所の特徴を明らかにしていきたい。

参考文献・資料

- 名著研究所，江戸名所図会「日本名所図会全集」巻1～巻4，名著普及会，1975。
釋敬順（1814）十万庵遊歴雜記。江戸叢書刊行会（1980）編『江戸叢書 第三巻』1-440。
国土地理院（2003）：『数値地図標高5mメッシュ』日本地図センター。
独立行政法人農業環境技術研究所（2010）：歴史的農業環境閲覧システム迅速図画像（[http://habs. dc. affrc. go. jp/](http://habs.dc.affrc.go.jp/)）
松田磐余（2008）：『江戸・東京地形学散歩』之潮，66-71。
尾藤章雄（2013）：「遊歴雜記」にみる江戸茶人の風景観 ―風景の復元による地理学的解析―。
山梨大学教育人間科学部紀要，15巻，11-16。（DVD）
尾藤章雄（2014）：「遊歴雜記」にみる江戸の眺望景観 ―景観記述と地形条件に基づく地理学的分析―。
山梨大学教育人間科学部紀要，16巻，141-148。（DVD）

注

1) すやり霞（すやりがすみ）は、大和絵によくみられる表現方法であり、横にたなびく霞を何本か描き込むことによって、絵の一部を省略、或いは異なる場面を一つの絵に含めるなどの操作を可能にするという特徴を持っている。遠近感を与えたり、場面を転換するために用いられることもあり、槍霞（やりがすみ）とも呼ばれる（デジタル大辞泉）。

2) 武蔵野台地を構成する地形面において豊島台は武蔵野面、淀橋台はより新しい時代に作られたとされる下末吉面に含まれている。後者は古東京湾が陸化したもので海生の砂やシルトとそれを覆う関東ローム層からなるため浸食されやすい上に、台地面の勾配が小さいので支谷が色々な方向に入りやすいとされる（松田，2008）。